

やすく、時は恐怖となり、心の不安を解消するために星占術や霊媒術が生まれたのであろう。これらの術は科学ではないし、その見きわめはまちがっていないと思う。

かつて天動説が絶対のものでされていた時代に、地球から見る惑星の奇妙な運行を説明するために、やたらに複雑な惑星軌道を考え出した神学的科学者があった。自分たちの住む地球を神の作った特別なものとしたい故に、宇宙における偶然的存在である地球をこじつけて説明した例であるが、ひところ世界文明をリードしていた西欧の中心点がドーバー海峡あたりにあるのは単なる偶然なのに、当時のイギリスやフランスが世界の中心として君臨する必然性をもつかのように説いたのも、同じたぐいの非科学的思考であった。

世の中には宇宙空間もふくめて、たしかに不思議な偶然的事象がある。しかしその多くは全くそれ以上説明の必要のない偶然そのもので、ただ珍しいこともあるものだと感心していればすむことだ。神秘性を感ずる必要はないし、悪用してでっちあげの説明をするのは非科学者のすることである。

スウェーデン語

式 正 英

「いまスウェーデン語の勉強しています」というと、いろんな返事や問いが戻ってくる。「スウェーデンでは英語やドイツ語が通じる筈だ。いゝ歳をしてわざわざ語学の勉強でもあるまいに。」という意見が多い。

終戦後、今村学郎氏（地形学者、元東京文理科大学助教授）が、G. H. Q.（連合軍総司令部）に勤めておられた頃、司令部の一米人と「英・独・仏・瑞（ズイ）」の語学で競争しあって面白かったと語っておられた。辻村太郎先生（地形学者、東京大学名誉教授）は数カ国語に堪能で、その中には勿論瑞（ズイ）も含まれている。およそ地理学に携わるもの瑞典（スウェーデン）語ぐらいの心得はあって然るべきなのだろうと学生の頃から考えていた。人口780万の小国、ストックホルム、ウプサラ、ヨーテボリー、ルンド、ウーミオなど大学の数は10指にみたないが、ド・イエール、アールマン、ウルストレーム等世界的地理学者を数多輩出している。ジオグラフィスカ・アナラーは地理学の専門誌としては権威を持っており、ウプサラ大学の自然地理学教室を訪ずれた日本人は、必ずその設備の良さにうならされている。

この地理学の先進国の言語を覚える気になったのは、1972年3月から1年間の外国出張中に3カ月間弱、ウブサラとストックホルムを訪ずれる計画を立てたからに他ならない。リンガ フォンや語学4週間ものから得るのでは、やはり何かもの足りない。結局言葉というのはその国の人から直接聞いてみてやっと安心できるものではあるまいか。その様な次第で丸ビルで夜開かれている講習会にでかけることにした。講師のセシリア・ウッターストレーム先生はストックホルム大学語学部出身の金髪の美人で、一年半ほど前に来日して、もはや日本語がかなり巧みであった。受講者は20数名、若者が殆んどだが、中年者も数名はいる。筆者にしてみれば、6年前の自動車教習所での受講以来の勉強である。教える一方の教師稼業にも時に直接、単純に教わることは、謙虚さを保つ意味も加わって必要だと思う。それには知らない外国語がもっともよい。ヴァル、スネラ、オ、レース、エフタ、メイ、アリホッパ(さあ皆さん、私の後について読んで下さい)。ハニ、ノラ、フローゴル(何か質問はありませんか)という具合に授業が始まる。「ドイツ語に近いではありませんか」と他人から云われても、教わっている身になれば、言語学上近似でも単語や独特の表現がある以上は、全部始めから覚える他にはない。ネー(いゝえ)、オヤッソー(おやそうですか)はむしろ日本語と同じではないか。スコール(乾杯)は「茶わん」のこと、グラスは「アイスクリーム」の意味しかない。ファル(父)、モル(母)を組み合わせて、モルフアル(母方の祖父)、モルモル(母方の祖母)ファルモル(父方の祖母)、ファルファル(父方の祖父)、子供はバーン、孫はバーンバーン、息子はゾーン、娘はドッテル、孫のうち息子方の男の孫はゾーンゾーン女の孫はゾンドッテル、それ故娘方の女の孫はドッテルドッテルと理詰めに組合わせて語ができていて面白い。ともかく、その国の文化を手早く理解するにはその言葉から知識を得ることが手取り早く有効だと思う。そのよい証拠に半年マルメに在住したことのある一青年が、初級の講習を熱心に受け直していた。アユ、アユー(さよなら、さよなら)。 (1971年12月13日)

ダブルパンチのドルショック

正井 泰夫

1971年は、日本経済はもとより、世界経済にとっても、大きな変動のあった年であった。私は、それを身をもって経験することとなった。

1971年8月17日に、羽田をたってオーストラリアのキャンベラへ向う予定であったが、そ